

日田条里四反畠地区

2003年

日 田 市 教 育 委 員 会

序 文

本書は、有限会社宝珠開発の委託を受けて、日田市教育委員会が調査主体となり、分譲住宅建設に先立ち発掘調査を行ないました、日田条里四反畠地区の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

遺跡の調査では、古代の集落遺構や古代から中・近世にかけての水田跡などが確認され、またこうした時代の遺物が出土するなど、貴重な成果を収めることができました。

この調査報告書が、文化財の保護や地域の歴史、学術研究等に、ご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、作業に従事いただきました皆様方や、調査にご協力を賜りました関係者の方々に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

平成15年7月31日

日田市教育委員会

教育長 後 藤 元 晴



写真1) 遺跡の遠景写真（写真中央が遺跡）

例　　言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成15年度に実施した日田条里四反畠地区の発掘調査報告書である。
2. 調査は分譲住宅建設に伴い、有限会社宝珠開発の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 調査にあたっては、株式会社ランドマップ（有）協力を得た。
4. 調査現場での実測は森山敬一郎・財津真弓（雅企画有限会社）、写真撮影は土居が行なった。
5. 本書に掲載した遺物実測は土居が行い、遺構・遺物の製図は藤野が行なった。
6. 遺物の写真撮影は、長谷川正美（雅企画有限会社）の撮影による。
7. 出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
8. 本書に用いた図面の方位は、磁北を指す。
9. 本書の執筆・編集は、土居が担当した。
10. 題字は、後藤　清（日田市教育委員会文化課長）の揮毫による。



本文目次

I	調査に至る経過と組織	1
IV	調査の経緯	1
IV	調査組織	1
IV	遺跡の立地と環境	2
IV	調査の記録	4
IV	調査の概要	4
IV	基本層序	6
IV	遺構と遺物	6
IV	その他の遺物	8
IV	まとめ	10

挿図目次

第1図	周辺の遺跡分布図 (1/10,000).....	3
第2図	調査区位置図 (1/2,500)	4
第3図	遺構配置図 (1/200)	5
第4図	基本土層図 (1/20).....	6
第5図	2・5・6号土坑、ピット1実測図 (1/30).....	7
第6図	出土土器実測図 (1/3)	9
第7図	出土石器・土製品実測図 (1/2)	9

插入写真目次

- 写真1 遺跡の遠景写真
- 写真2 調査作業風景
- 写真3 基本土層写真
- 写真4 調査に参加された作業員の皆さん

表 目 次

第1表 出土土器観察表	12
第2表 出土石器観察表	12
第3表 出土土製品観察表	12

写真図版目次

写真図版1 調査区遠景、調査区近景、遺構検出状況、発掘状況

写真図版2 1・2・5・6号土坑、1号ピット、須恵器・紡錘車出土
状況

写真図版3 出土遺物



写真2) 調査作業風景

I 調査に至る経過と組織

(2) 調査の経緯

平成15年3月3日付けで有限会社宝珠開発より市教育委員会に、日田市大字田島字四反畠14-1ほかで宅地分譲地造成に先立つ事前の照会文書が提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である日田条里に該当し、すでに平成11年4月6日には開発予定地の西側隣接地において、駐車場造成に伴う試掘調査を行い、古代・中世の遺構の存在が確認されていた。

このため、今回は遺跡の広がりや内容を確認することを目的に、平成15年3月20日に機械を使って試掘調査を行なったところ、やはり古代・中世の柱穴などが検出され、土師器などの遺物が発見された。こうした結果をもとに、開発主と遺跡の取扱いについての協議を重ねたところ、予定地が農振地区に該当することから、その除外後に発掘調査を実施することになった。

その後、再度協議を行い、6月12日から本格的に発掘調査を行うことでまとまり、6月11日には双方の間で委託契約を交わした。調査範囲は遺跡の大半が盛土となるため、道路部分と遺跡の内容確認の必要な箇所を対象とすることとした。

発掘調査作業は6月12日から機械を使って本格的に開始したが、梅雨に入ったために、調査区には雨水が溜まりプール状態となる日が続いた。こうした状況のなか、長期間にわたって水が溜まり続けることが安全上良くないと判断し、作業員を多めに投入して調査を短期間に終了させることとした。25日には遺構検出作業や測量、さらには一部遺構の掘下げ、遺構の写真撮影を行い、翌日には全ての作業を終えた。

(2) 調査組織

発掘調査から報告書作成までの関係者は、以下のとおりである。

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 後藤 元晴（日田市教育委員会教育長）～7月31日

諫山 康雄（同教育長）8月11日～

調査統括 後藤 清（同文化課長）

調査事務 佐藤 晃（同文化課主幹兼埋蔵文化財係長）

園田恭一郎（同文化課主査）

酒井 恵（同文化課主事補）

調査担当者 土居 和幸（同文化課主査）

調査員 行時 桂子（同文化課主任）

若杉 竜太（同文化課主事）試掘調査担当

渡邊 隆行（同文化課主事）

藤野 美音（同文化課調査補助員）

調査作業員 穴井 昌生、石井猪之助、江藤キミ子、河津 定雄、五反田静子、後藤 孝市、

財津 利枝、財津 由太、庄内 武子、高倉富美子、田中 昇、高村 三郎、

筒井 英治、原田 強、平川 五男、平川 友義、本田 早苗、松岡 初次

整理作業員 穴井 豊子

II 遺跡の立地と環境

日田条里四反畠地区は日田市大字田島字四反畠に所在する。遺跡の存在する場所は、ちょうど官庁街の西側にあたり、北東側には江戸時代に城下町として栄えた豆田町の町並みが残っており、遺跡周辺には公共施設や住宅などが建ち並ぶ現状にある。これまでに遺跡一帯では開発に伴う試掘調査が行なわれてきたものの、本格的な発掘調査は行なわれておらず、遺跡の内容は不明であった。

遺跡は北側を流れる花月川と南側を流れる三隈川（筑後川）に挟まれた、標高約87mの盆地東部の沖積面に立地している。遺跡の東側には阿蘇4火砕流で形成された“慈眼山”、“大原”、“会所宮”といった標高150m前後の丘陵が連なっている。

周辺の遺跡を概観すると、盆地東側の丘陵上や丘陵下の低地に遺跡が集中するように分布している。まず、“慈眼山”丘陵周辺には、中世大蔵氏の拠点と推定されている大蔵古城跡（1）、や慈眼山遺跡（2）が認められる。前者は本格的な調査が行なわれていないため全容は把握されていないが、試掘調査や広範囲に残る“城”などの字名や現存する遺構から大規模な城跡の存在が想定されている。また、後者は平成2年度の調査で幅、深さとも約2m規模の建物を区画すると推定される大溝が検出されているほか、横板井桁組井戸などの遺構や、「門」、「林」などの墨書き土器が出土している。これら遺跡の南側には、先の大蔵氏に関連する施設と考えられている15～16Cの遺構が発見された上ノ馬場遺跡（4）が存在し、東側丘陵上には丸山古墳（3）が残る。

次に、“大原”丘陵周辺には縄文時代から古代までの複合遺跡で、「田」、「山」などの墨書き土器、瓦が出土した大波羅遺跡（8）や、古墳時代から古代の遺構が発掘された日田条里飛矢地区（11）が存在し、丘陵上には古墳時代の石蓋土壙墓群が確認されている赤追遺跡（9）や箱式石棺を主体部とし円筒埴輪が出土した直径35mの円墳である業師堂山古墳（10）が点在する。

さらに、南の“会所宮”丘陵周辺には、弥生時代から中世期の遺構や遺物が発見された会所宮遺跡（12）のほかに、丘陵上には後山古墳（13）6世紀後半代の鳥羽塚古墳（14）、横穴式石室を有する会所宮古墳（15）が築かれている。

このほか、遺跡の西方400mの場所には、廣瀬淡窓が開拓した私塾成宜園跡（7）があり、これまでに継続した確認調査において心遠処や井戸跡など当時の遺構が確認されている。

注

- 1) 土居和幸他編「慈眼山遺跡・大蔵古城跡」『日田市埋蔵文化財年報』平成4・11年度 日田市教育委員会 1994・2001
- 2) 板本 審弘編『慈眼山瀬戸口遺跡』大分県教育委員会 1992
- 3) 行時 志郎編『上ノ馬場遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第23集 日田市教育委員会 2000
- 4) 渡邊隆行他編『大波羅遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第29集 日田市教育委員会 2001
村上久和他編『大波羅遺跡』大分地方法務局日田支局新營に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県教育委員会 2001
- 5) 若杉竜太他編『日田条里飛矢地区』日田市埋蔵文化財調査報告書第40集 日田市教育委員会 2003
- 6) 行時志郎他編『赤追遺跡』『日田市埋蔵文化財年報』平成5・8年度 日田市教育委員会 1995・1998
- 7) 土居和幸他編『会所宮遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第11集 日田市教育委員会 1996
- 8) 昭和58年度に、市教委が発掘調査を実施。
- 9) 注7と同じ
- 10) 土居和幸他編「史跡成宜園跡」『日田市埋蔵文化財年報』平成4・6～11年度 日田市教育委員会 1994・1996～2001



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/10,000)

III 調査の記録

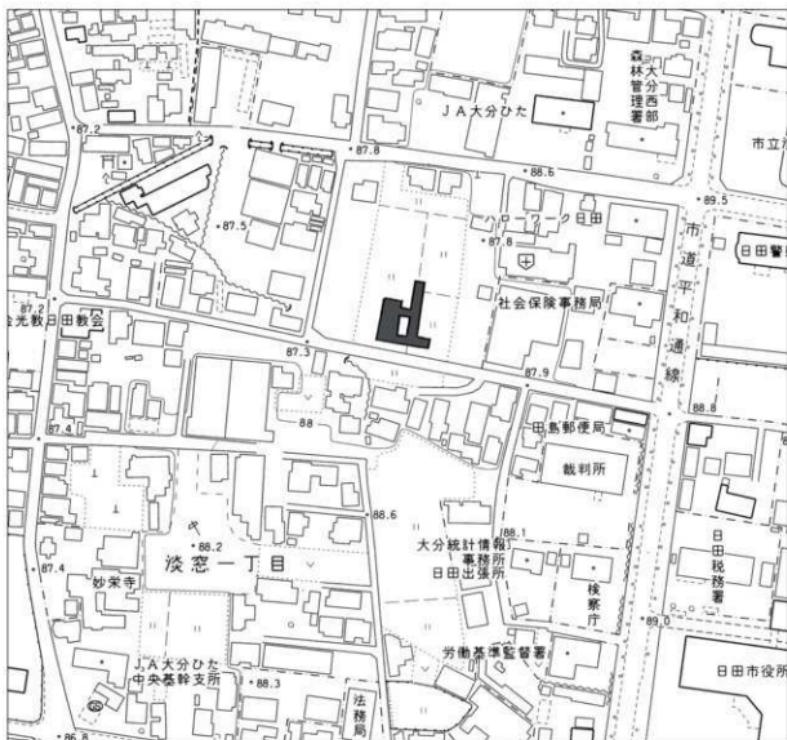
(1) 調査の概要 (第2図)

今回の調査は、試掘調査結果を踏まえて遺構が検出された面まで掘下げを行い、遺構の記録に重点を置き、水田層については土層観察による記録とした。

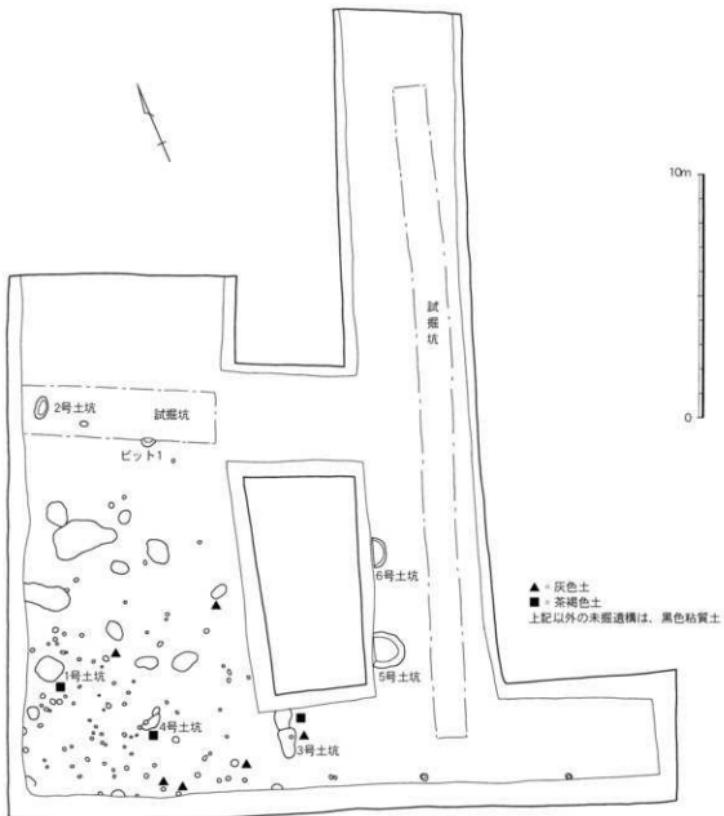
調査において検出した遺構は、第3図の遺構配置図に示すとおり、土坑15基、ピット101で、これらの遺構のうち、完掘した遺構や検出段階で遺物を包含する遺構については遺構番号を付したが、それ以外の遺構については番号を付していない。

また、検出した遺構の広がりについては、調査区の南西側に集中するように認められ、北東側に向うにつれ密度は薄くなっている。こうした遺構の埋土は黒色粘質土、茶褐色土、灰褐色土の3つに分けられ、これらの区別は第3図中に示している。

なお、今回の調査面積は510m²である。



第2図 調査区位置図 (1/2,500)



第3図 遺構配置図 (1/200)

(3) 基本層序 (第4図、挿入写真3)

この遺跡での層位は12枚確認でき、概ね次のような堆積を基本とする。1層は水田表土層である。15~20cm前後。2層も水田表土層であるが、上部にわずかではあるが褐色土が認められることから、上部は1層の水田盤土であったと考えられる。5~10cm前後。3層は褐色の水田盤土で、2層の水田盤土であろう。5cm前後。4層は水田表土層である。10~15cm。5層は4層の水田盤土。3cm前後。6層は水田表土層。10cm前後。7層は6層の水田盤土。5cm前後。8層は灰色土に茶褐色土が混じり、鉄分を多く含んでいる。15~20cm。9層は灰色土に暗茶褐色土が混じり、8層に類似している。5~10cm。10層は黒色粘質土で、粘り気が強い。15~25cm。11層は灰褐色砂質土で、拳大程度の小礫を含んでいる。5~10cm。12層は明褐色土で粘性がある。30cm以上の堆積が認められた。これらのうち、1~7層にかけて遺物の出土が目立った。

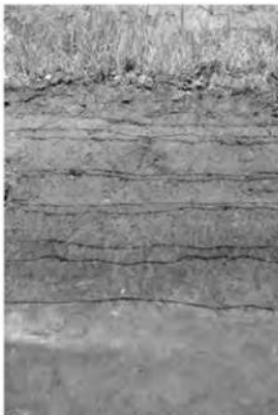
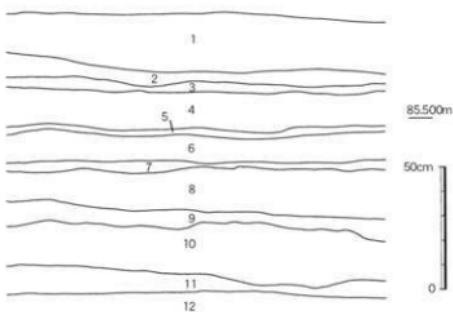


写真3) 基本土層写真



第4図 基本土層図 (1/20)

(3) 遺構と遺物 (第3・5図、図版2・3)

土坑15基については、平面形が橢円形もしくは円形を呈するもの（1・2・5・6号）と、不整形を呈するもの（3・4号）の大きく二つに分けられる。これらの平面規模は60cm~3mの大るものがあり、不整形な土坑の方が規模は大きく、埋土は黒色粘質土（10層）をなす。土坑の遺物残存状況は、全ての土坑を掘ったわけではないので十分に把握しきれないが、2・5・6号の状況からすれば、遺物の量は少ないものと考えられる。

また、ピットについては径が10~40cm大の大きさで、10~20cm大のものが目立つ。これら小型のピットについては、柱穴というよりは、杭等の痕跡と考えられるものも散見された。このほか、柱穴と考えられるものもあるが、建物に復原できそうな柱穴列は認められなかった。

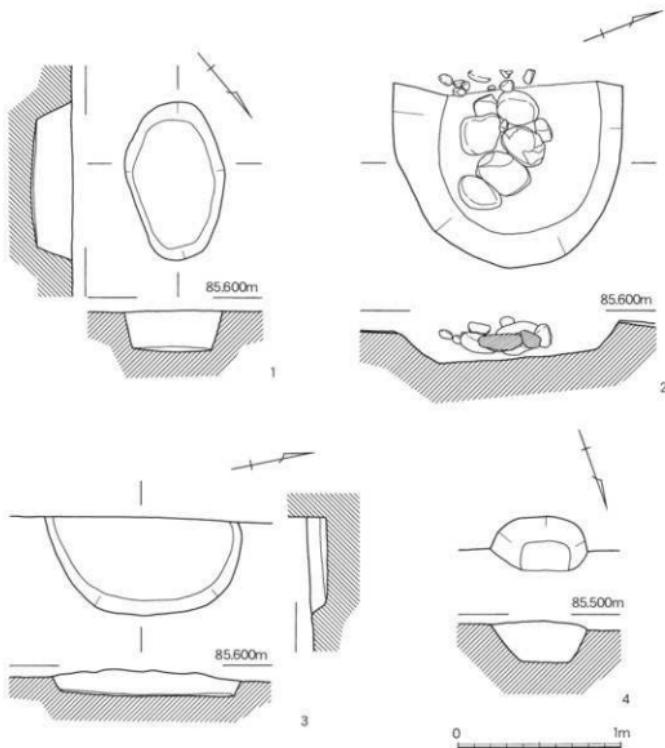
以下、主な遺構について報告する。

1号土坑（第3図、写真図版2）

調査区の南東側で検出した。規模は長軸95cm、短軸90cmを測る。掘下げは行なっていないものの、埋土中より土器片が1点出土している。埋土は茶褐色土。

2号土坑（第3・5図、写真図版2）

調査区の東側で検出した。平面形は楕円形をなし、規模は長軸96cm、短軸59cm、深さ約25cmを測る。埋土は2層に分けられ、上層は黒色粘質土（10層）で、下層は12層をブロック状に含む。遺物は土器片が1点出土している。



第5図 2・5・6号土坑、ピット1実測図（1/30）

3号土坑（第3図）

調査区の南側で検出した。平面形は不整形をなし、規模は長軸125cm、短軸75cmを測る。掘下げは行なっていないものの、埋土中より土器片が1点出土しているが、図示できるものではない。埋土は灰色土。

4号土坑（第3図）

1号土坑の東側で検出した。平面形は不整形で、規模は長軸95cm、短軸40cmを測る。掘下げは行なっていない。埋土は灰茶褐色土。

5号土坑（第3・5図、写真図版2）

中央南側で検出した。平面形は円もしくは楕円形をなすと考えられる。規模は長軸110cm、短軸140cm、深さ約20cmを測る。埋土は2層に分けられ、上層は黒色粘質土（10層）で、小礫を含む。下層は黒灰褐色土で、砂質で12層をブロック状に含む。土坑の中心には頭大の河原石が整然と並べるように認められた。上層中より土器片が1点出土している。

6号土坑（第3・5図、写真図版2）

5号土坑の北側で検出した。平面形は円形をなすと考えられる。規模は長軸119cm、短軸60cm、深さ約10cmを測る。埋土は1層で、灰褐色土である。遺物は出土していない。

ピット1（第3・5図、写真図版2）

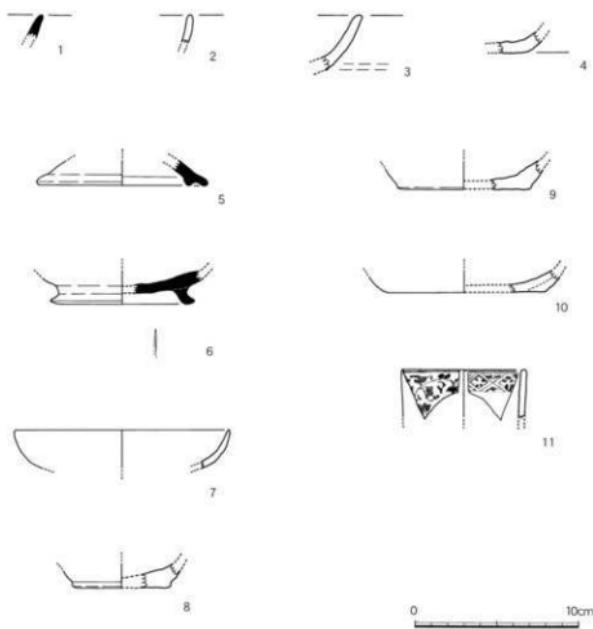
2号土坑の東側で検出した。試掘調査の際に確認されていたもので、規模は経30cm前後、深さ約25cmを測る。埋土は黒色粘質土（10層）である。遺物は出土していない。

(4) その他の遺物（第6・7図、写真図版2・3）

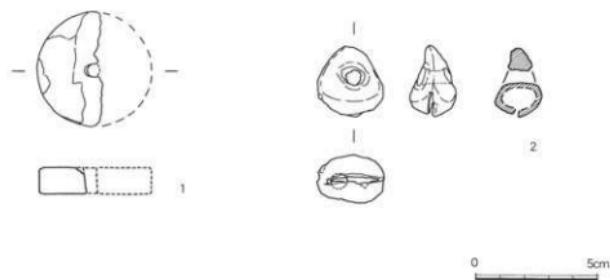
調査中に出土した土器等をまとめる。

第6図の1は須恵器の坏身であろう。口縁部は外反する。表採品。2は土師器の皿。表採品。3は土師器の坏である。口縁部は外反し、端部は丸みをもつ。表採品。4は土師器の皿で、底面の調整は糸引きをなす。表採品。5は須恵器の坏蓋である。端部は丸みを持つ。復原底径10.4cmを測る。表採品。6は須恵器の坏身である。胴部の上半部を欠く。底部の高台は外側に開き、端部は跳ね上がり、丸みを持つ。復原底径8.8cmを測る。8層出土。7は土師器の坏である。調整は内外面ともナデ仕上げ。復原底径13cmを測る。表採品。8は土師器の皿である。底部外面はヘラ切り、内面は回転ナデ仕上げ。復原底径6cmを測る。表採品。9は土師器の皿である。胴部の上半部を欠く。底部外面はヘラ削り。内面はナデ仕上げ。復原底径8cmを測る。表採品。10は土師器の皿である。底部外面は糸切り、内面はナデ仕上げ。復原底径9.6cmを測る。表採品。11は染付の猪口である。外面は唐草文、内面には四方櫛文が施されている。

第7図の1は紡錘車である。断面は長方形を呈し、径4.7cmを測る。滑石製。6層出土。2は土鈴である。表採品。



第6図 出土土器実測図（1/3）



第7図 出土石器・土製品実測図（1/2）

IV まとめ

今回の調査では、これまで報告したとおり、土坑やピットなどの遺構や水田層が確認された。以下、調査結果について、簡単にまとめることとする。

まず、遺構についてであるが、その時期は遺構出土の遺物量が少なく、年代を決定付ける資料に乏しいが、参考となる資料に基本土層の8層、水田面4から出土した第6図6の須恵器坏身がある。高台の端部が外側に開き、跳ね上げる特徴を有していることから、小田編年VI期にあたり、7世紀後半から8世紀前半頃の遺物と考えられる。発見された遺構群はこの水田面下にあり、なかでも2・5号土坑は、10層（黒色粘質土）が埋土で、その埋土には内面ヘラ削りの土師器片を含むことからすると、遡っても古墳時代前期、下っても7世紀後半から8世紀始め頃の幅のなかで捉えられると推定される。また、10層（黒色粘質土）を埋土としない1・3・4・6号土坑についても、図示していない採集資料の中には縄文土器や弥生土器がみられず、1号土坑からは土師器片が出土していることを考慮すると、先の2・5号土坑に近い時期あるいはそれよりは古い時期の所産と考えることができそうである。大雑把ではあるが、ここでは検出した遺構群の時期を古墳時代に営まれたものと推定しておきたい。これら遺構の内容や性格については調査面積が限られ、また全掘をしていないので、不明と言わざるを得ない。竪穴住居跡や建物といった遺構が見当たらず、調査区内での遺構の分布状況が調査区の南西側に極端に集中して見られ、北東側には遺構の痕跡が全くみられないことは、集落の中心が西側に存在するものと予想され、今回の調査区の遺構は集落の北東隅にあたるものと理解される。この遺跡の西側約400mに位置する史跡咸宜園では、奈良時代の遺構や遺物が発見されており、この集落が繋がっている可能性も十分に考えられる。^(注1)

次に水田層であるが、肉眼観察では4面が確認でき、上から水田面1（1・2層上部）、水田面2（2層下半・3層）、水田面3（4・5層）、水田面4（6・7層）に区分される。このうち、水田面4については、先に述べたとおり出土遺物からの7世紀後半から8世紀前半頃の時期と推定される。この上面にあたる水田面1～3については、良好な遺物が確認されていないため、それぞれの時期判断はできないが、12世紀以後の中世期にあたると考えられる底部が糸切り底をなす土師皿（第6図2・10）や、それ以前の古代に属すると考えられる底部がヘラ切り底をなす土師皿（第6図8・9）、さらには紋様の特徴から18世紀頃の所産と考えられる染付（第6図11）や、17～18世紀の土鉢が数固体出土した尾漕遺跡A地区のものに形態が類似している土鉢（第7図2）からして、古代・中世から近世、そして現在まで使われていたものであろう。これら水田層のうち、水田面4に関しては、その時期を7世紀後半から8世紀前半頃と想定できる説であるが、日野尚志氏の研究によると、日田市内における律令期の条里地割については、その分布を残る字名などから①花月川条里区、②有田川条里区、③刃連条里区、④高瀬川条里区、⑤日隈条里区、⑥大肥条里区の6ヶ所に分かれている。それによると、今回の水田面は花月川条里区に該当し、その南限にあたる。今回の調査ではプラントオパールなどの科学的調査や畦畔や水路といった水田層の検出・確認を行なっていないため、断定はできないが、水田面4が律令期の条里成立に関係する可能性があり、こうした点については、今後の周辺調査によって解明されることを期待したい。^(注2)

以上のことから、この遺跡では7世紀後半から8世紀前半以前の古墳時代には集落が営まれ、律令期前後には水田開発が行なわれ、以後水田として継続して利用され現在に至ったものと想定される。これまでに、盆地内の沖積地での遺跡の確認例は少なかったが、近年の緊急発掘調査において

丘陵や台地下で遺跡が発見されることが多くなってきた。とりわけ、この遺跡周辺では顕著で、奈良時代の墨書き土器が発見された慈眼山瀬戸口遺跡^(注5)や大波羅遺跡を筆頭に、日田条里飛矢地区や史跡成宜園跡^(注6)では遺構や遺物が、会所宮遺跡^(注7)では遺物が発見されている。奈良時代の日田郡には郷が五所あり、日田条里四反畠地区を含め周辺の遺跡が存在する一帯は“刃連郷”に属していたとみられている。この“刃連郷”は、『豊後風土記』に伝える日下部氏が律令成立以前から拠点としていた場所でもあり、日田郡における律令期前夜の動向を知る上で、本遺跡は興味深い資料を提供したといえる。

注

- 1) 小田 富士雄「九州の須恵器」『世界陶磁全集2』1979
- 2) 土居和幸他編「史跡成宜園跡」『日田市埋蔵文化財年報』平成4年度 日田市教育委員会 1994
- 3) 友岡信彦他編「佐寺原遺跡・尾瀬遺跡群・有田塚ヶ原古墳群」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
大分県教育委員会 1998
- 4) 日野 尚志「日田周辺における古代の歴史地理学的研究」『九州文化史研究所紀要』第16号 九州大学九州文化史研究施設 1971
- 5) 坂本 嘉弘編「慈眼山瀬戸口遺跡」大分県教育委員会 1992
- 6) 渡邊隆行他編「大波羅遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第29集 日田市教育委員会 2001
- 7) 若杉竜太他編「日田条里飛矢地区」日田市埋蔵文化財調査報告書第40集 日田市教育委員会 2003
- 8) 注2)と同じ
- 9) 土居和幸他編「会所宮遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第11集 日田市教育委員会 1996
- 10) 西別府 元日「第1章 古代」『日田市史』日田市 1990



写真4) 調査に参加された作業員の皆さん

第1表 出土土器観察表

探査番号	遺構名	層位	種別	器種	法 量			調 整			胎 土	焼 成	色 調		備 考			
					口径	腹部径	底径	高	内面	外面			内 面	外 面				
第6図-1	表探	-	須恵	环?	-	-	-	(1.5)	回転ナシ	回転ナシ	回転ナシ	回転ナシ	AB	良	青灰色	青灰色 底面外側に へら跡		
第6図-2	表探	-	土師	皿	-	-	-	(1.8)	ナギ?	ナギ?	ナギ?	ナギ?	DH	良	明橙色	明橙色		
第6図-3	表探	-	土師	楕	-	-	-	(3.3)	ナギ?	ナギ?	ナギ?	ナギ?	ABCDEH	良	灰棕褐色	灰棕褐色		
第6図-4	表探	-	土師	壺	-	-	-	(1.0)	不明	不明	不明	不明	ABCDEH	良	明棕褐色	明棕褐色		
第6図-5	表探	-	土師	环蓋	(0.4)	-	-	(1.5)	ナギ?	ナギ?	ナギ?	ナギ?	BE	良	明白橙色	明墨灰色		
第6図-6	-	8層	須恵	环身	-	-	(2.8)	(2.0)	回転ナシ	回転ナシ	回転ナシ	回転ナシ	-	-	BE	良	青灰色	青灰色
第6図-7	表探	-	土師	楕	(1.30)	-	-	(2.4)	ナギ?	ナギ?	ナギ?	ナギ?	-	-	A B D E	良	明棕褐色	明棕褐色
第6図-8	表探	-	土師	皿	-	-	(6.0)	(1.5)	ナギ?	ナギ?	ナギ?	ナギ?	ヘラ切?	AB C D E	良	明棕褐色	明棕褐色	
第6図-9	表探	-	土師	皿	-	-	(8.0)	(1.8)	ナギ?	ナギ?	ナギ?	ナギ?	ヘラ切?	ABC D E	良	明白黄色	明白黄色	
第6図-10	表探	-	土師	皿	-	-	(9.6)	(1.4)	ナギ?	ナギ?	ナギ?	ナギ?	素切?	ABC D E	良	明棕褐色	明棕褐色	
第6図-11	表探	-	染付	器	器	-	-	(6.8)	(1.9)	-	-	-	-	-	-	白色	白色	外側 花唐草文 内側 四方傳文

※単位はcm () は現存長。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第2表 出土石器観察表

図版番号	遺構名	層位	器 種	石 材	直 径	孔 口 径	厚 さ	重 さ	備 考
第7図-1	-	6層	筋 錘車	滑 石	(4.7)	(0.5)	(1.1)	(23.3)	

※単位はcm () は現存長。

第3表 出土土製品観察表

探査番号	遺構名	器 種	法 量			胎 土	焼 成	色 調	備 考
			高 さ	巾	厚 さ				
第7図-2	-	土 鉢	2.3	2.7	0.9	B D E H	良	明白黄色	

※単位はcm () は現存長。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒



調査区遠景（東から）



調査区近景（北から）



遺構検出状況（南から）



遺構検出状況（西から）



発掘状況（北から）



発掘状況（東から）

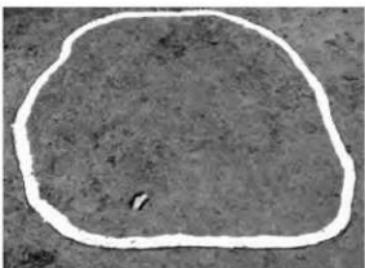


発掘状況（東から）



発掘状況（南から）

写真図版 2



1号土坑検出状況（東から）



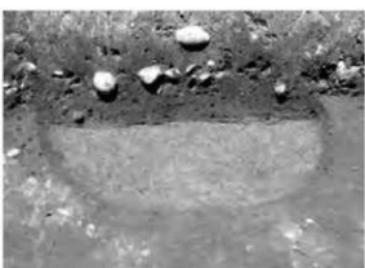
2号土坑検出状況（東から）



2号土坑発掘状況（東から）



5号土坑発掘状況（東から）



6号土坑発掘状況（東から）



1号ビット検出状況（北から）



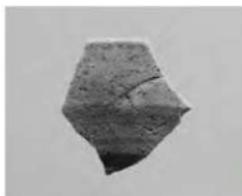
須恵器出土状況（東から）



紡錘車出土状況（東から）



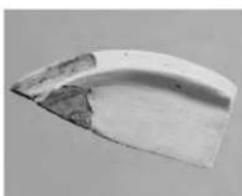
6-1



6-3



6-4



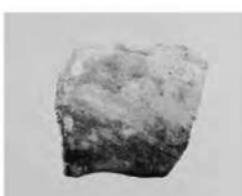
6-5



6-5



6-6



6-7



6-8



6-9



6-10



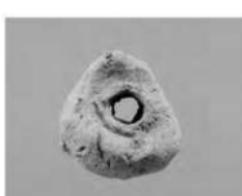
6-11



6-11



7-1



7-2



7-2

報告書抄録

ふりがな	ひたじょうりよんたんばたちく
書名	日田条里四反畠地区
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	46
編著者名	土居和幸
編集機関	日田市教育委員会文化課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2003年8月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
日田条里四反畠地区	大分県日田市 大字田島字四反畠 14-1番ほか	44204-6	651044	33°56'23"	130°19'23"	20030612 ~20030626	510m ²	分譲住宅 造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日田条里四反畠地区	集落跡	古代 中世 近世	土坑、ピット 水田層	須恵器、土師器 紡錘車、土鈴、染付	

日田条里四反畠地区

日田市埋蔵文化財調査報告書第46集

2003年8月30日

編集　日田市教育委員会 文化課
 〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1
 発行　日田市教育委員会
 〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1
 印刷　尾花印刷有限会社
 〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8